

◆◆◆ バングラデシュでの調査を終えて

日本のODA（政府開発援助）の一環として、バングラデシュ国において「気象業務の能力向上プロジェクト」が計画されています。当センターからもプロジェクトの事前調査団の一員として、10月下旬から11月下旬の約4週間、バングラデシュの首都ダッカ市を訪問し、バングラデシュ気象局（BMD：国防省に所属）の本局と地方の観測所の調査を行ったので、バングラデシュの最近の気象業務等の事情について紹介します。



写真-1 ダッカの気象レーダー

バングラデシュは国土の90%がガンジス河を始めとする大河のデルタ地帯で、その大部分は標高10m以下の低平地です。南部地域はサイクロンによる高潮浸水被害、北部地域は近隣国の山岳地域に囲まれていることから洪水被害の多い国です。その他にも、竜巻やスコール、大雨、強風、熱波・寒波等の自然災害により、多くの被害が出ています。同国には既に日本から4基の気象レーダーが供与されており、現在北東部に5基目の気象レーダーが建設されています。これによって気象レーダーの観測網がほぼ全国をカバーし、全国の合成レーダー画像の作成も可能になります。しかし現在のBMDの技術力は気象レーダーから得られるデータを十分に活用できる状況ではなく、レーダーの有効利用や数値予報結果の利用等を含む、総合的な予報能力・観測能力向上が今後の課題となっています。



写真-2 果てしなく広がる田園風景

バングラデシュは、北海道の2倍程度の面積に約1億5千万人が暮らす、世界一人口密度の高い国といわれています。日本では貧困が誇張されて報道されているようですが、今回の初訪問で、バングラデシュに対するイメージが一変しました。今回の調査では、BMD本局に加えて首都から数百kmはなれた地方の観測所の調査も3回にわたり実施しました。いずれに行っても、緑豊かな水田と水路、畑、森が遥か彼方まで広がっており、収穫の済んだ水田や畑では牛、羊、鶏が、池や川にはアヒルや鴨が飼育されています。地方の村や町の通りには飲食店や市場がならび、米、野菜、果物、魚・肉類等の食物があふれており、これまでの先入観が崩れ去りました。

次回はバングラデシュでの気象観測や予報の紹介をさせていただきます。

(財団法人気象業務支援センター振興部国際業務課専任主任技師 山本忠治)